

註

- 1) 千葉県文化財センター『市原市番後遺跡・神明台遺跡』昭57
- 2) 条痕であるかハケメであるか微妙である。ハケメについては横山浩一氏に詳しいが、条痕や擦痕についてはその施文具等不明な点が多い。条痕とは1個の木片ではなく、棒状工具等を束ねたものと解しているが、この意味でも貝殻条痕とは異なる。
- 3) 杉原荘介『栃木県出流原における弥生時代の再埋葬群』明治大学 昭56 なお、須和田式A類、B類についてはこれより先に下記の文献がある。
- 4) 荒海式土器に刺突文が存在することから、刺突文自体の変遷を考慮すべきであろう。なお、荒海式土器の刺突文は円形を呈する小さなものであり、出流原遺跡の刺突文も工具、施文法等から数種類に区別される。
- 5) この時期の土器の胴部文様帯は7単位のものが多いが、7単位という数字を念頭に置けば文様の施文順位も明らかである。
- 6) 杉原荘介他『千葉県天神前における弥生時代中期の墓址群』明治大学 昭49

千葉市矢作貝塚出土の紡錘車形石製品について

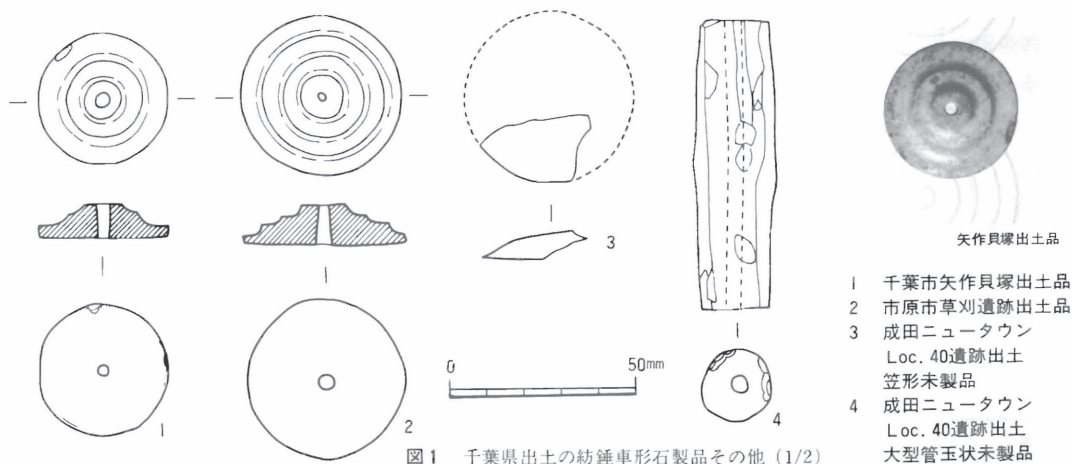
石倉亮治

千葉市矢作貝塚は縄文時代後・晩期の貝塚として知られており、昭和55年千葉県水道局の水道記念館建設に伴いその一部が千葉県文化財センターにより調査された(註1)。縄文時代の遺構、遺物のほかに弥生時代末及び古墳時代後期の住居址も検出されたが、今回紹介する紡錘車形石製品はその中の鬼高期の住居址 003号址の攪乱中より出土した。すでに報告書において紹介済みであるが、遺跡の性格上縄文時代の遺構、遺物に主眼が置かれたため、本品に関する記述は簡略なものであった。そこで、以下に述べるような本品の重要性に鑑み、調査担当者の了解を得て、改めてやや詳しく

観察と検討を加えてみることにした。

*

紡錘車形石製品に関する考察は、大正8年高橋健自氏の『古墳発見石製模造器具の研究』が最初である。高橋氏は石製模造の鏡としての分類を示された。その後、伊東信雄・伊藤玄三両氏により円形石製品をも含めて16ヶ所の古墳を中心とする出土遺跡の集成がなされた(註2)。次いで岩崎卓也氏により31ヶ所の遺跡の集成がなされ、その中で山口県長光寺山古墳と東京都宝萊山古墳を削去された(註3)。さらに穴沢味光・西岡秀雄両氏による集成がなされ、再び東京都宝萊山古墳が追加



された(註4)。これらの先学の業績により紡錘車形石製品の出土の中心が前期の古墳にあることは明らかである。

紡錘車形石製品の片面は、研磨による光沢が著しく同心円状の段を持つ。この段には数種類あり、矢作貝塚出土のものは二段である(図1-1)。石材はかつて『碧玉製紡錘車』と呼ばれていたように、その多くが碧玉製とされていた。しかしながら、色調、研磨の痕跡等を観察する限りその多くは凝灰質頁岩である。

矢作貝塚出土のものは最下段の外周が丸味を帯びて内弯している。このような正円形の各段を作り出す技法として、ロクロを使用したとの見解がある(註5)。矢作貝塚出土品の有段面にも放射状の擦痕が実見された。ロクロの使用がどの段階の工程からおこなわれたか明らかではないが、ここに一つの例を紹介することができる。昭和44年から2年間にわたりおこなわれた成田ニュータウン造成に伴う調査の際、Loc.40の019-B号址出土品の中に笠形石製品が存在する(図1-3,註6)。残念ながら欠損のため、現存するのは全体の5分の2程であるにもかかわらず、平面形及び側面を観察すると紡錘車形石製品の未成品であることが

わかる。穿孔した様子はみられず、あるいは穿孔の際に欠損に至った可能性を残しながらも正円形の外周プランを保っており、外周の推定径は4.5cm前後であろう。この段階までにはロクロ状の回転台による調整はみとめられない。

なお、同じ住居址から長さ7.7cm程の大形管玉状未成品(図1-4)が出土しており、いずれも凝灰質頁岩であるが、この組み合わせは奈良県メスリ山古墳出土のものを彷彿させる(図2)。メスリ山古墳出土の紡錘車形石製品は、中程に大形管玉状の石製品(約6cm)2個を連ね、両端に同心円状の段のある面を内側に向け、中心の孔を鉄芯により貫かれている(註7)。この遺物の性格について論じられるとき、メスリ山古墳が常に話題として登場するのはこのような出土の状態に起因する。

次に、紡錘車形石製品の各部のつくりに注目することにしたい。矢作貝塚出土品は、有段面こそ研磨による光沢が著しいものの、他の面は平面としての調整がなされているのみで、有段面程の研磨はみられない。つまり、有段面の方に『みがき』の意図のあることがわかる。本来、紡錘車として使用するには平坦面こそ精緻な研磨によって調整されなければならない。メスリ山古墳出土品のような出土の状態は、紡錘車としての機能面からみても不自然といわねばならない。また、木更津市手古塚古墳出土のものは有段面が三段となっており、側面の観察によれば最下段の外周が平坦面よりも有段面側で大きくなっている。矢作貝塚出土品の有段面にみられる放射状の擦痕は、手古塚出土品では鉄錆により確認できないものの、有段面の精巧なつくりからみてやはりロクロ状の回転台による調整が考えられる。この他、千原台ニュータウン草刈遺跡123-B号址出土の紡錘車形石製品(図1-2)は、径4.4cm、最下段の外周は平坦面と垂直に接しており、有段面は三段のつくりとなっている(註8)。なお、中心孔は矢作貝塚出土品、手古塚古墳出土品ともに有段面側の孔径が平坦面側に比べて大きいのに対し、草刈遺跡123-B号址出土品は平坦面側の孔径が大きくなっている。また、段のつくりを観察すると、草刈遺跡123-B号址出土品は深い抉りによって段を構成し、手古塚古墳出土品の抉りは浅く各段とも横幅が縦高よりも大きくなっている。そして、矢作貝塚出土品の場合には直角に近い抉りにより落差の

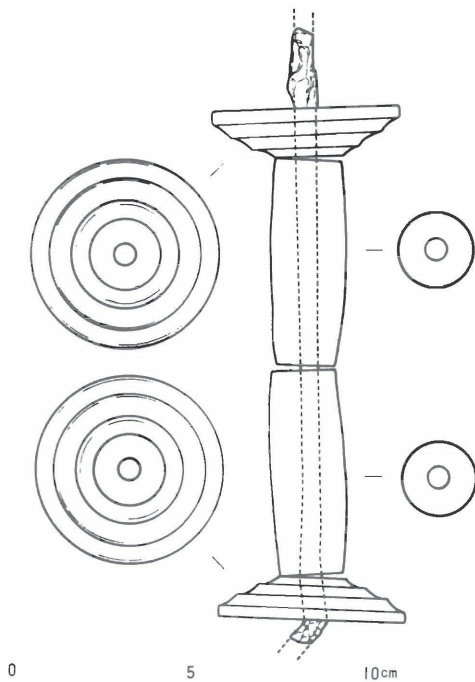


図2 奈良県メスリ山古墳出土紡錘車形石製品
(註7文献より転載)

大きな段をつくりだしている。

全国的に見ても古墳以外の出土品としては石川県片山津遺跡(註9)、福井県河和田遺跡(註10)、千葉県成田ニュータウンLoc.40、同千原台ニュータウン草刈遺跡、そして矢作貝塚の5ヶ所のみである。草刈遺跡と矢作貝塚を除く他の3遺跡は、石製品の工房址遺跡と考えられるところから、攪乱中とはいえ、集落からの出土は新たな問題提起となった。すなわち、二つの可能性について検討されなければならない。一つは、草刈遺跡123-B号址及び矢作貝塚003号址の周辺の前期古墳(古く削平された)の存在であり、他の一つは、前期古墳の被葬者と深い関りのある集落の存在である。冒頭でも触れたように、古墳出土の紡錘車形石製品の場合には、大阪府紫金山古墳、黄金塚古墳、三重県石山古墳、静岡県三池平古墳、千葉県手古塚古墳、福島県会津大塚山古墳等の前期古墳に出土の中心がある。手古塚古墳出土品の場合には、主体部粘土槨の遺骸の頭部付近、三角縁神獸鏡、四獸鏡及び籠手に近接して出土しており(註11)、有段面に残された付着物からこの遺物が布により包まれていたことを示している。このことから紡錘車形石製品と古墳の被葬者の深い関係が窺われる。こうした背景のもとで集落からの出土が確認されるならば、古墳と住居の共通した祭具、あるいは古墳の被葬者が生前からその象徴的な所有物として携帯していた器具(註12)という可能性についても検討されなければならない。このような可能性を持った紡錘車形石製品は、中期古墳にみられる石製模造品とは全く異った性格の遺物であることを指摘しておきたい。

*

木更津市手古塚古墳出土の紡錘車形石製品を実見するにあたり、国立歴史民俗博物館杉山晋作氏

と、県立上総博物館築比地正治氏に大変お世話いただき謝意を表する次第である。

(8班・佐倉第三事務所)

註

- 1) 清藤一順他『千葉市矢作貝塚』昭56
- 2) 伊東信雄・伊藤玄三『会津大塚山古墳』昭39
- 3) 岩崎卓也「いわゆる碧玉製紡錘車について」『木代修一先生喜寿記念論文集3—民族史学の方法』昭52
- 4) 穴沢咏光・西岡秀雄「田園調布宝来山古墳の研究」『史誌』15号 昭56
- 5) 前掲(4)に同じ。
- 6) 天野努・編『公津原II』昭56
Loc.40の019-B号址の中の遺物番号46「剝片」とされた遺物は筆者の実査によれば図1-3に示す笠形未製品である。
- 7) 伊達宗泰・小島俊次『メスリ山古墳』『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告35』昭52
- 8) 千原台ニュータウン草刈遺跡は千葉県文化財センターにより近い将来報告が予定されており、詳細は報告書の刊行を待って参照されたい。
- 9) 大場磐雄他『加賀片山津玉造遺跡の研究』昭38
- 10) 大場磐雄他「福井県河和田遺跡の玉作工房址」『日本考古学協会第31回総会研究発表要旨』昭40
- 11) 木更津市手古塚古墳出土の紡錘車形石製品の出土状況に関して、国立歴史民俗博物館助教授杉山晋作氏より御教示いただいた。
- 12) 大阪府黄金塚古墳の筒形石製品との伴出、奈良県茶臼山古墳の鐙形石製品との伴出、同メスリ山古墳の鉄芯付紡錘車形石製品、岐阜県白山社古墳の筒形石製品との伴出等に着目し、紡錘車形石製品が『玉杖』の一部であり、呪術的な儀器の一端をなすものであるとの見解もある。

八日市場市吉田所在の須恵器窯について

土屋 潤 一 郎

1. 環境と現状

本窯跡は、八日市場市の北西部にあたる吉田地区八辺^{やっぺ}に所在する。八日市場市に隣接する香取郡多古町を流れる栗山川の支流である借当川の南側

台地の裾部に位置する。借当川から樹枝状に支谷が入り込み、極めて複雑な地形を造っている。本窯跡は、この台地の北部中央をきざむ一支谷の奥部にあり、台地が水田と接しようとする西向した